

2024年6月16日 説教「良心をもって」

使徒の働き 23章1～10節

ユダヤ人たちから隔離した千人隊長は兵営にパウロを取り調べ前にむち打ちをするように命じましたが、ローマ市民であることがわかると、鎖を解き、改めて審議することにしました。

### 1. パウロと大祭司アナニヤ (1～3節)

①神の前に生活 (1) 「パウロは議会を見つめて、こう言った。『兄弟たちよ。私は今日まで、全くきよい良心をもって、神の前に生活してきました。』」

千人隊長によって集められたのは、祭司長たちと議会の議員たちでした。議場において、話す機会を得たパウロは語り始めました。彼のこれまでの信仰姿勢の基本でした。それは、「全くきよい良心をもって、神の前に生活してきた」というものでした。「良心」という言葉は、パウロはその書簡の中で、20回ほど使っています。他の書簡には少ないことから、パウロ的な言葉であったと言えましょう。

②大祭司アナニヤ (2) 「すると大祭司アナニヤは、パウロのそばに立っている者たちに、彼の口を打てと命じた。」

パウロの言葉を受けて、大祭司アナニヤは怒りました。傲慢だと感じたのでしょう。そして、パウロのそばにいる者たちに「彼の口を打て」と命じたのです。これ以上話させるなどというところでありましょう。

③白く塗った壁 (3) 「そのとき、パウロはアナニヤに向かってこう言った。『ああ、白く塗った壁。神があなたを打たれる。あなたは、律法に従って私をさばく座に着きながら、律法にそむいて、私を打てと命じるのですか。』」

しかし、パウロは遠慮をしません。大祭司アナニヤに向かって、「ああ、白く塗った壁!」とは強烈なパンチです。倒れかかった壁が、白いしっくい塗られている様です。そして、さらに「神があなたを打たれる」と直撃です。また、「律法に従って裁く座にある人が、律法を無視して、私を打てと命じるのですか。」と言って、自分の部下への命令を批判したのです。

### 2. 死者の復活の望みのこと (4～6節)

①そばの者の注意(4) 「するとそばに立っている者たちが、『あなたは神の大祭司をののしるのか。』と言ったので、」

パウロの言動に周りの者は、あつげにとられながらも、「とんでもないことを言う者よ。あなたは大祭司さまをののしっているのだぞ。」「分際をわきましろ」というところでありましょう。

②パウロの納得 (5) 「パウロが言った。『兄弟たち。私は彼が大祭司だとは知らなかった。確かに、“あなたの民の指導者を悪く言ってはいけない。”と書いてあります。』」

パウロは、「私は彼が大祭司だとは知らなかった」と述べましたが、世



界伝道旅行に出ているパウロが大祭司の顔を見るのは初めてであっ  
かかもしれません。しかし、おそらくユダヤ教の要職にある人であるとは、  
気づいていたと思われます。そこで、彼は出エジプト記 22:28 にある  
「神をのろってはならない。また民の上に立つ者をのろってはならない」  
を引用して、彼らの非難を受け入れたのでした。

③私はパリサイ人の子 (6) 「しかし、パウロは、彼らの一部がサドカ  
人で、一部がパリサイ人であるのを見て取って、議会の中でこ  
う叫んだ。『兄弟達。私はパリサイ人であり、パリサイ人の子で  
す。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けている  
のです。』」。

したたかなパウロは、そこにいる人たちのグループを冷静に読み取  
りました。そして、かなりの人々がサドカイ人たちで、またパリサイ人が  
一定数いることも察知しました。そして、こう述べたのです。「兄弟達。  
私は(もともと)パリサイ人であり、パリサイ人であった父の子です。さ  
て、自分が問題とされているのは、死者の復活という望みのことな  
のです、と述べました。言うまでもなく、キリストの復活のことを語ったのです。

### 3. 論争の激化 (7~10 節)

①パリサイ人とサドカイ人 (7~8) 「彼がこう言うと、パリサイ人と  
サドカイ人との間に意見の衝突が起こり、議会は二つに割れた。  
サドカイ人は、復活はなく、御使いも霊もないと言い、パリサイ  
人は、どちらもあると言っていたからである。」

パウロの問題提起は、パリサイ派とサドカイ派の間に論争をもた  
らしました。サドカイ人はモーセ五書に最終権威をおきました。そこ  
にない復活も御使いも霊も受け入れませんでした。祭司階級が主導し  
政治に加わりました。パリサイ人は厳格な律法主義であり、五書だけ  
でなく預言書や諸書も用いました。復活、御使い、霊を受け入れました。  
双方は教理の面で衝突することになりました。

②パリサイ人の擁護 (9) 「騒ぎがいよいよ大きくなり、パリサイ派  
のある律法学者たちが立ち上がって激しく論じて、『私たちは、  
この人に何の悪い点も見いださない。もしかしたら、霊か御  
使いかが、彼に語りかけたのかもしれない。』』と言った。」

そこで、パリサイ人はパウロを擁護し、彼の異邦人伝道のことも含  
め、霊か御使いの語りかけの可能性を伝えたのでした。

③千人隊長の配慮 (10) 「論争がますます激しくなったので、千人  
隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと  
心配し、兵隊に、下に降りて行って、パウロを彼らの中から  
力づくで引き出し、兵営に連れて来るように命じた。」

千人隊長には、新たなる論争が激しくなっているのを見て、このま  
まだとパウロが命を落とすと判断し、力づくで兵営に連れて来るよう  
に部下に申し渡したのでした。

### 《結論》

そもそもこの議場において、大祭司アナニヤがパウロの口を封じようとした  
のは、パウロが「兄弟たち。私は今日まで、全くきよい良心をもって、神の前に  
生活してきました。」と述べたからでした。大祭司やユダヤ人議会の人々た  
ちを前に、「兄弟たち」と同列に呼んだことが、まず礼儀をしらないと思わせた  
ことでしょう。さらに、自分が「全くきよい良心をもって、神の前に生活してき  
ました。」と、堂々と言う様子は、傲岸不遜だと感じさせたことでしょう。パウロは  
そんなことも弁えた上で、真正面から述べたのです。

それでは、ここでパウロが「きよい良心をもって」とはどのような意味な  
のでしょう。一般的にも、「良心をもって行動する」といったことは耳にします。しかし、  
その良心は定まりのないもので、人によって内容は異なるし、それを述べた本  
人も、その時々で右に行ったり左に行ったりすることがあるでしょう。もっとも、  
「律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをする場  
合は、…、彼らの良心も一緒になってあかしし…」(ローマ 2:14-15)とある  
ように、主が与えてくださる一般恩寵の「良心」があります。

しかし、パウロが使っている「良心」というのは根本的には特別恩寵として  
の「良心」だと考えられます。彼は使徒 24:16 では「いつも、神の前にも人の  
前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています」と述  
べています。この御言葉から言えることは、良心を保つためには、最善を尽くす  
ことができるのだということです。また、テモテ第一 1 章 19 節には「ある人た  
ちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました」と記されています。つま  
り、特別恩寵の良心を捨てると、信仰の危機が訪れるというのです。パウロが  
「全くきよい良心をもって、神の前に生活してきた」という言い方は、自分には  
罪がないということを行っているのでは決してありません。彼は、「私は罪人の  
かしらです」(I テモテ 1:15)と断言していることから明かです。

それでは「きよい良心をもって、神の前に生活する」とはどんな意味な  
のでしょう。上記のことなどをまとめて考えると、それはどんな時も「神のみ言葉」に  
戻り、御言葉に徹底的に従い、御言葉に生きる信仰の姿勢です。パウロはこ  
のことに於いては、正々堂々と証することができたのです。

私達はどこまでいっても罪人です。パウロは「私には、自分のしていること  
がわかりません。私は自分がしたと思うことをしているのではなく、自分が憎  
むことを行っています。」(ローマ 7:15)と告白しています。しかし、それでもい  
つも御言葉に戻っていったのです。私達も、いろいろな問題に遭遇します。そし  
て、その時なりの不安定な対応に陥りやすいです。しかし、どんな時にも、御言  
葉に戻っていかうではありませんか。そして、それに従い、生きることを目指して  
いきたいのです。どうせまた罪に戻るのだから、などとふて腐れるのではなく、  
素直に主の御言葉に戻っていくことが、信仰の破船を招かない秘訣なのです。

昔、藤村操という人が「人生は曰く不可解」と遺して自殺しました。しかし、  
今日でも年間 2 万人以上が自殺で命を落としています。生きる指針ともいえ  
る良心の源である聖書の御言葉を人々にお届けしていきましょう。